

アメリカ研修レポート

・アメリカで薬剤師の資格を得るために必要な事について

まず、大学の学位の取得です。

半数以上はだいたい3～4年かけて **pre-pharmacy** と呼ばれるコースの単位を取得して、その後、PCAT と呼ばれる全米共通の試験を受けて合格した人が **pharmacy** コースに進みます。Pharmacy コースで4年間勉強してアメリカの国の定める試験に合格し、薬剤師として認定されるそうです。

Pharmacy コースの4年生のときに9か月の実習があります。

これは、実際のある学生さんの去年の実習の場所です。

月	実習場所
7月	インターナショナルメディシンクリニック
8月	タコマ癌センター
9月	ウォールグリーン調剤薬局
10月	アメリカ合衆国退役軍人診療所 入院患者
11月	アメリカ合衆国退役軍人診療 骨髄移植・臍帯血
12月	ウォールグリーン調剤薬局 点滴療法
1月	ボブジョンソンズ薬局
2月	ニュージーランド オークランド大学
3月	休み
4月	シーマー病院

この生徒さんは海外に行っているようですが、海外での研修は必須ではなく、実習のスケジュールや場所など、ある程度自分で決めることができます。

ワシントン大学では、**pre-pharmacy** コースにだいたい毎年800人ほどの応募があり、履歴書の段階で200人に絞られ、その後入試で約100人が入学資格を得ます。入学した生徒はほぼ全員卒業して薬剤師試験にもほぼ100%合格するそうです。

・アメリカの保険制度について

アメリカは日本のような国民皆保険制度はありませんが、アメリカにも公的健康保険制度というのはあります。しかし、65歳以上の国民、障害者、低所得者、米軍勤務者とその家族以外はこの制度は受けることができません。したがって、勤務する会社が雇用者の医療費の一部を負担したり、または勤務先の会社が提携している保険会社を利用したり、自

営業や自由業の人は個人で民間の保険会社を利用したりします。

Co-pay という、一定金額を自己負担する制度もあります。この制度によって、患者さんは本当に病院にかかるべきかどうか、薬が必要かどうかを考えることができます。

・薬局選びについて

自分が加入している保険会社と提携している薬局のみで保険が使えます。よって、個人経営の薬局にとってはとても厳しい環境だそうです。

・薬代について

アメリカには薬価はありません。保険会社や保険プランによって、同じ薬でも薬局で支払う金額が違うそうです。

また、全ての薬が保険で支払われるとも限らず、保険会社や保険の種類によって使えない（保険がきかない）薬があります。薬剤師は、処方されている薬が保険でカバーされるのかも確認して、もし保険でカバーできない薬が処方されていた時は、処方医に連絡して同じ作用で保険が効く薬に変えてもらうそうです。

さらにチェーン薬局と個人経営の薬局で、保険会社との契約内容も異なるため、薬の値段が違うこともあります。やはり、個人経営の薬局にとってはとても厳しい環境のようです。

このように、アメリカは保険のシステムがとてもシビアで、いかに医療費を安くするかが医療チームの大事な課題の一つであり、薬剤師にとってもそれは大切な仕事です。

薬剤師は、薬に払う値段を安くすることだけでなく、チーム全体で協力して1つの病気全体にかかる医療費を安くするためにはどうするかを考えることが課題です。

例えば禁煙の提案、エクササイズや食べ物の提案など、薬にかかわること以外のことも考えて患者の健康のモニタリングをします。

Pharmaceutical care の目標は患者の QOL の向上です。

・病院を見学して

病院の薬剤師の仕事は、医師に薬の提案をすることがメインで、患者さんと接することはあまりないそうです。

40 年前までのアメリカの薬剤師に求められていたことは、薬の提供のみで、院内薬局も病院の地下 1 階に追いやられていました。しかし、今のアメリカにおいて薬剤師は薬のエキスパートとして医療チームの重要な一員になっていて、患者様の治療方針について薬の選択、DOSE などの面で Dr. に提案したり話し合ったりして一緒に患者様の治療方針を決めています。

今はほぼすべてのチームに薬剤師が配置されています。ガン患者の疼痛コントロールなど、重篤な疾患には 2 人の薬剤師が配置されるそうです。

自分のチームに薬剤師が配置されない Dr.は、プライドを傷つけられて少し機嫌を損ねてしまうこともあるほど、薬剤師のチーム内での存在感は大きいそうです。

今では医師の監督下で抗凝固剤や糖尿病、コレステロールの薬などの処方箋を書くことも薬剤師の仕事となっています。

しかし、そこまでの地位を薬剤師が獲得するまでに30年以上の努力があったということです。

感想

アメリカと日本では薬学部の勉強内容、保険のシステムや薬剤師の仕事内容など、違うところだけで、驚きました。

アメリカの薬剤師の方々は、突然の訪問にもかかわらず、とてもわかりやすく、丁寧にお話ししてくださいました。薬剤師としての知識だけでなく、とても高いコミュニケーションスキルを感じました。アメリカの薬学部では、コミュニケーションのクラスもあるそうです。これは日本の薬学部ではなかなか身につかないのではないかと感じました。

アメリカの保険制度と日本の保険制度を比べてみて、日本の国民皆保険はとても素晴らしいことだと思いました。アメリカには今4500万人の人が無保険でいるそうです。

薬局薬剤師と病院薬剤師の仕事内容の差はアメリカも日本もあるのだと思いました。薬局薬剤師の方が、病院薬剤師と比べると大学で勉強したことをあまり生かし切れていなくて、もどかしさを感じることもあると言っていたのはとても印象的でした。

アメリカから学ぶべきこと、日本の素晴らしいことをそれぞれ見極めてこれからの仕事に生かしていけたらと思います。

とても貴重な機会をいただき、ありがとうございました。